

地域 ニュース 大阪

近大・森本教授の

痛み学 入門講座

◆ 4 ◆



もりもと・まさひろ 平成元年、大阪医科大学大学院(麻酔科学専攻)修了。同大講師を経て、8年に近畿大学医学部麻酔科講師。22年から現職。医学博士。日本ペインクリニック学会理事。

人間の身体は、気圧、気温、湿度といった気象要因にさまざま

な影響を受けている。実際に、患者さんが「膝の痛みが強くなってきたから、明日は雨ですな」と予知することがあるが、これが驚くほどに当たってしまう。これに関しては、青森県立保健大学の研究チームが「関節リウマチ」の患者さんらに翌日の天気を予想してもらったところ、正解率は約62%で、炎症が強いほど正解者が多かったという結果もある。

「夕方、子供が騒ぐと雨になる」と迷信のような謬もあるが、低気圧の接近・通過に伴う身体の変化を如実に表している。同じように、中国では「腰痛、雨打洞」、米国では「足の親指が痛むと雨になる」という。なお、オーストラリアではかつて「フェーンが吹くと気分が不安定になり、自殺者が増加する」との結果も報告された。こうした気象要因との関連で症

天気痛

状の変化がみられる病気が「気象病」である。痛みを生じる疾患のなかにもこの側面を持つものは多く、特に「天気痛」と呼ばれる。

このため、天気痛にどんな気象要因が影響しているのかを確認する研究も多く行われてきた。例えば三重大学の研究で

低気圧と気温低下が影響か

状態は、椎間板の変性による腰痛を保持した患者さんに高圧酸素治療室に入ってもらったところ、気圧の低下によって痛みが悪化した。これは椎間板内圧が相対的に高くなり、周囲の神経を刺激したことによる。同じように鳥取大学も高圧酸素治療室を使って、気圧の変化によって関節内

関節は気圧の低下によって膨張し痛みを生じるが、炎症が強いほどその痛みが強い③温度の低下による痛みの悪化は、交感神経への刺激による④湿度の上昇も痛みを強くすることがある。などと整理できる。

その一方で、心因性要素の関与も大きい。つまり、気象変化がストレスを引き起こすストレスナーとなり、主に大脳辺縁系(感情や記憶に関係する脳の部位)に影響(不安や抑鬱)を与え、自律神経系に病的な変化をもたらし得るのである。



イラスト 松本好永

にある関節包の変化を調べた。すると、気圧により関節包は膨張、収縮するが、痛みの出現には気圧の高低だけでなく、その変化の速さも関係していた。さらに名古屋大学はラットで、神経痛が低気圧、低温で強くなることを確認した。

こうしたさまざまな研究結果から、①痛みは低気圧の接近や通過によって強くなる。雨の降る前が最悪で、降ってしまつと軽快②

「帯状疱疹後神経痛」による痛みで長年苦しんでいた患者さんが、「天気予報が当たれへんようになってん」と、うれしそうに話すことがある。痛みが軽くなるにつれて天気を予知できなくなったのだ。「病(痛み)は気から」の「気」は気象であり、感情なのだ。

(近畿大学医学部麻酔科教授 森本昌宏)

次回は10月7日掲載の予定です。